

平成30年度 尾瀬傷病事故統計

(尾瀬山の鼻・尾瀬沼ビジターセンター傷病記録等から)



(傷病事故に消防と連携して救助活動を行う)

平成31年2月

公益財団法人 尾瀬保護財団

目 次

1	入山者数の状況	1
2	傷病事故の発生状況	2
	(1) 年度別発生状況	2
	(2) 地域別発生状況	3
	(3) 原因別発生状況	3
	(4) 時期別発生状況	4
	(5) 月別発生状況	4
	(6) 年齢別・男女別発生状況	4
	(7) 傷病者の居住地別発生状況	5
	(8) グループ人数別発生状況	5
	(9) 傷病事故の通報状況	6
3	救助活動	6
	(1) 救助出動状況	6
	(2) ヘリコプター要請状況	7

1 入山者数の状況

尾瀬が利用できる季節は道路開通後であり、おおよそ5月の大型連休後から10月末までであるが、同期間に環境省が各登山口に登山者カウンターを設置し、年間の尾瀬入山者数を計測している。この結果によれば、尾瀬の入山者は平成2年度から平成7年度まで50万人台前半で推移し、平成8、9年度にはテレビ等マスコミでの頻繁な尾瀬の紹介により60万人台前半に増加した。こうした利用者数の増加により、尾瀬の生態系への影響が懸念されたが、平成10年度には景気低迷と週末の悪天候から入山者数は約46万人に減少し、平成14年度までに40万人台で推移し、平成17年度には平成元年からの計測以来最低の約31万8千人となった。

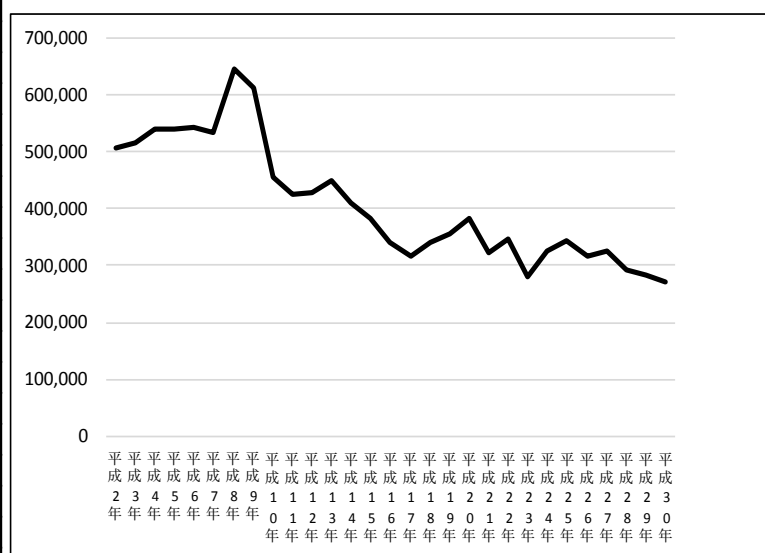
平成20年度以降は尾瀬国立公園の拡張エリアを含めての数値だが、平成23年度には東日本大震災やそれに伴う原子力発電所の事故、また同年7～9月にかけて尾瀬や周辺の集中豪雨による木道流失・通行止め等が影響し、28万1千人と計測以来初の30万人を下回る結果となったものの、ほぼ横ばいで推移している。

平成30年度は例年と比較して積雪量は少なく5月上旬で水芭蕉の見ごろを迎えた。7月には尾瀬ヶ原山ノ鼻地区において真夏日を13日間も記録し最高気温は33℃となった。また10月の週末には台風21.24号が襲来し木道の冠水や登山道への倒木が多かったことにより、3年連続30万人を下回る結果となった。

一方でミズバショウの見頃が早まり、5月の入山者数は平成29年度よりも約6,000人多くなった。

入山者数の推移

年度	入山者数 (人)	対前年比
平成2年	505,840	
平成3年	515,090	101.8%
平成4年	539,790	104.8%
平成5年	540,264	100.1%
平成6年	542,058	100.3%
平成7年	534,196	98.5%
平成8年	647,523	121.2%
平成9年	614,317	94.9%
平成10年	455,409	74.1%
平成11年	425,807	93.5%
平成12年	428,446	100.6%
平成13年	448,041	104.6%
平成14年	409,942	91.5%
平成15年	384,251	93.7%
平成16年	341,558	88.9%
平成17年	317,847	93.1%
平成18年	341,369	107.4%
平成19年	354,901	104.0%
平成20年	381,700	107.6%
平成21年	322,800	84.6%
平成22年	347,000	107.5%
平成23年	281,300	81.1%
平成24年	324,900	115.5%
平成25年	344,200	105.9%
平成26年	315,400	91.6%
平成27年	326,100	103.4%
平成28年	291,860	89.5%
平成29年	284,390	97.4%
平成30年	269,700	94.8%



尾瀬の入山者数の推移（環境省のデータから作成）

2 傷病事故の発生状況

平成30年度に公益財団法人尾瀬保護財団（以下、当財団とする）が管理を受託した尾瀬山の鼻ビジターセンター（群馬県より管理受託）及び尾瀬沼ビジターセンター（環境省より管理受託）において、職員が対応を行ったものについて作成した。

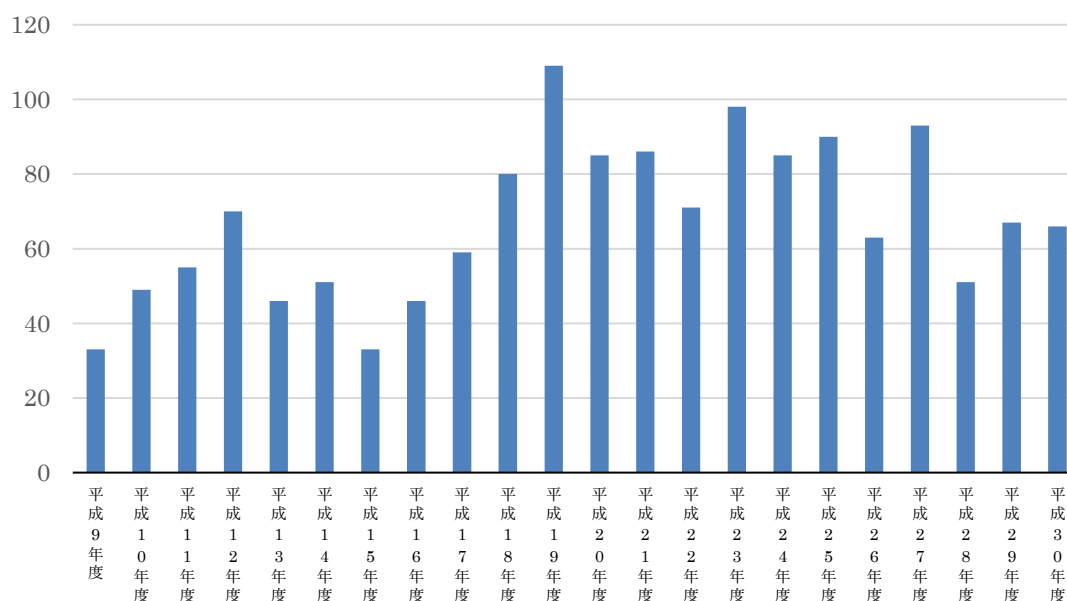
(1) 年別発生状況

平成30年度に当財団が管理する尾瀬山の鼻ビジターセンター及び尾瀬沼ビジターセンター職員が対応した傷病事故は66件で昨年とほぼ同様であった。

年度別発生状況

年度	区分	発生件数 (件)	傷病者内訳				
			死亡	病気	行方不明	負傷	その他
平成9年度		33	2			31	
平成10年度		49	4			45	
平成11年度		55	1			54	
平成12年度		70	2			68	
平成13年度		46				46	
平成14年度		51	2			49	
平成15年度		33	1			32	
平成16年度		46	1			45	
平成17年度		59				59	
平成18年度		80	3			77	
平成19年度		109	1			94	14
平成20年度		85	1			73	11
平成21年度		86	1			70	15
平成22年度		71				58	13
平成23年度		98		4		69	25
平成24年度		85	1	3	1	62	18
平成25年度		90				77	13
平成26年度		63				61	2
平成27年度		93		4		69	20
平成28年度		51		3		41	7
平成29年度		67	1	9	2	51	4
平成30年度		66	1	6		59	

年度別発生状況



(2) 地域別発生状況

地域別では例年同様鳩待峠～山ノ鼻間、尾瀬ヶ原の順で多く発生した。

鳩待峠～山ノ鼻の事故件数が全体の 37.9%となり、前年度(43.1%)より若干減少した。また尾瀬ヶ原の事故件数が全体の 19.7%となり、前年度(19.4%)とほぼ同様な結果となった。

地域別傷病発生件数(30年5月～10月)

地区	区分	発生件数 (件)	発生比率	傷病者内訳					(参考) 平成29年度
				死亡	病気	行方不明	負傷	その他	
鳩待峠～山ノ鼻(VC周辺含)		25	37.9%		3		22		27
尾瀬ヶ原(研究見本園含)		13	19.7%				13		13
大江湿原～尾瀬沼北岸(VC周辺含)		4	6.1%				4		9
三平下～大江湿原									3
三平下～尾瀬沼南岸		3	4.5%				3		2
沼山峠～大江湿原		2	3.0%				2		2
大清水～尾瀬沼		2	3.0%		1		1		3
沼尻～見晴		3	4.5%		1		2		5
見晴～御池(平滑ノ滝、三条ノ滝含)									
至仏山									1
燧ヶ岳		2	3.0%	1			1		1
アヤメ平		1	1.5%				1		
その他		2	3.0%		1		1		
不明		9	13.6%				9		1
合計		66	100%	1	6		59		67

* 山ノ鼻地区3件(至仏山荘、山ノ鼻小屋、尾瀬ロッジ)は鳩待峠～山ノ鼻(VC周辺含)に含める

(3) 原因別発生状況

傷病事故に至った原因では、木道・歩道での転倒・転落による事故が44件で、全体の66.7%と前年からの68.7%から減少したが、全体の半数以上を占めており、木道整備区間が多い尾瀬国立公園の特徴を示している。原因は写真撮影や景色を眺めるなどよそ見による足の踏み外し、雨や雪で滑ったことによる転倒等様々である。木道は、高架や段差・階段になっている場所もあり、ちょっとした気の緩みが命に関わる大事故にもつながりかねない。また、病気などで歩行困難になる事例も少なからず見受けられるが、日常生活での体調管理や無理な行程に起因する場合も多く、ゆとりをもった行動と装備は不可欠である。

事故の多くが、入山者の気の緩みや不注意から生じており、尾瀬利用者への注意喚起を行う等の呼びかけに力を入れていく必要がある。

原因別発生状況(30年5月～10月)

原因	区分	発生 件数 (件)	傷病者内訳						(参考) 平成29年度	
			死亡	病気	行方不明	負傷		その他		
						自力下山	搬送	自力下山		搬送
木道上の転倒		44				40	6		41	
歩道上の転倒		3				2	1		5	
病気		6	1	5					8	
疲労・低体温									4	
落石										
道に迷い									2	
雪崩・雪渓崩落										
雷										
徒渉失敗									1	
その他		2		1		1			5	
不明		11				9			1	
合計		66	1	6		52	7		67	

* 疲労・低体温：体調不良やふらつきなど * 自力下山か搬送かは救助隊出動の有無

(4) 時期別発生状況

今シーズンは、木道上で滑って転倒するケースが多かった。雨や霜などで木道が滑りやすくなっている場合には、特に注意が必要である。

時期別発生状況（30年5月～10月）

時期	区分	発生 件数 (件)	傷病者内訳						(参考) 平成29年度	
			死亡	病気	行方不明	負傷		その他		
						自力下山	搬送	自力下山		搬送
春(4・5・6月)		20		3		14	3			27
夏(7・8月)		23		2		20	1			24
秋(9・10・11月)		23	1	1		18	3			16
計		66	1	6		52	7			67

(5) 月別発生状況

月別では、6月の発生件数が多く、原因は木道での転倒・転落が占めている。7月以降は10月まで平均的に発生しているが、よそ見や写真撮影、会話に夢中になりすぎた事なども大きな要因と考えられる。また、軽装や無理な行程などによる、木道上での転倒・転落負傷も原因となっていると考えられる。

月別発生状況（30年5月～10月）

月	区分	発生 件数 (件)	傷病者内訳						(参考) 平成29年度	
			死亡	病気	行方不明	負傷		その他		
						自力下山	搬送	自力下山		搬送
4月										
5月		3		1		1	1			7
6月		17		2		13	2			20
7月		12				12				16
8月		11		2		8	1			8
9月		12		1		10	1			5
10月		11	1			8	2			11
11月										
合計		66	1	6		52	7			67

(6) 年齢別・男女別発生状況

年齢別では、30代以下が18.2%、40代以上が62.1%と、中高年の傷病事故割合が圧倒的に高い。特に60代・70代の事故が目立ち、この年代は救助隊によって搬送される重傷のケースも多い。

年代別・性別発生状況

年齢	区分	発生 件数 (件)	30年度						29年度					
			男		女		男女計 (%)	男		女		男女計 (%)		
			(件数)	比率(%)	(件数)	比率(%)		(件数)	比率(%)	(件数)	比率(%)			
20歳未満		6	2		4			1			2			
20代		3	2	7.6%	1	10.6%	18.2%		4.5%			9.0%	13.4%	
30代		3	1		2			2			4			
40代		3	1		2			1			2			
50代		6	3		3			5			5			
60代		19	8	25.8%	11	36.4%	62.1%	11	46.3%		13	32.8%	79.1%	
70歳以上		13	5		8			14			2			
不明		13	2	3.0%	11	16.7%	19.7%	3	4.5%		2	3.0%	7.5%	
合計		66	24	36.4%	42	63.6%	100%	37	55.2%		30	44.8%	100%	
					66						67			

(7) 傷病者の居住地別発生状況

例年同様に、東京都・埼玉県・神奈川県を中心とした関東圏が大半を占めている。尾瀬入山者の居住地別割合をそのまま反映した結果と思われるが、気軽な登山と油断してしまうことも原因と考えられ、時間や体力を考慮した計画と事前の準備が必要である。

都道府県別

都道府県	区分	傷病者内訳						合計	(参考) 平成29年度	
		死亡	病気	行方不明	負傷		その他			
					自力下山	搬送	自力下山			搬送
北海道			1					1	1	
福島県						2		2	3	
茨城県					2			2	6	
栃木県		1			2			3	2	
群馬県			1		1			2	7	
埼玉県					5	1		6	9	
千葉県			1		2	1		4	4	
東京都			1		11	2		14	10	
神奈川県			1		7	1		9	10	
新潟県					1			1		
静岡県			1		1			2		
山梨県					1			1	1	
富山県									1	
大阪府					1			1	2	
広島県					1			1	1	
愛知県					1			1		
鳥取県									1	
海外					1			1	1	
不明					15			15	8	
合計		1	6		52	7		66	67	

(8) グループ人数別発生状況

過去2人以上の小グループの事故発生割合が高かったが、昨年からは単独での事故が増えており、全体の半数近くが単独行である。ツアーについては、ガイドによる安全管理ができていないツアーもあるが、ガイドも添乗もないツアーもあり、安全管理に課題もある。

傷病事故発生時に手当やレスキューを真っ先に行うのは、同行者であることが多いが、重度な傷病事故の場合にはセルフレスキューが困難であることから、単独行は十分な注意が必要である。

形態	区分	発生 件数 (件)	傷病者内訳						比率 (%)	(参考) 平成29年度	
			死亡	病気	行方不明	負傷		その他			
						自力下山	搬送	自力下山			搬送
単独		27		3		19	5		40.9%	31	
グループ		14		2		12			21.2%	20	
ツアー		11	1			8	2		16.7%	13	
学校		2		1		1			3.0%	2	
不明		12				12			18.2%	1	
合計		66	1	6		52	7		100%	67	

*グループ：同行者が1名以上の場合

(9) 傷病事故の通報状況

通報の約 62%が、傷病者本人がビジターセンターや山小屋へ来所し、口頭で行っている。尾瀬では、大半が携帯電話の通話エリア圏外のため、最寄りの有人施設に駆け込む必要があり、そこからビジターセンターへ連絡が入ることもある。

通報方法	区分	通報者					合計	比率 (%)	(参考) 平成29年度
		本人	同行者	他人	山小屋	その他			
口頭		41	14	5	4	2	66	100%	96%
携帯電話									3.0%
電話									1%
無線									
その他									
合計		41	14	5	4	2	66	100%	100%
比率		62%	21%	8%	6%	3%	100%		

* 山小屋・救助隊：ビジターセンター職員対応のものも含める

3 救助活動

(1) 救助出動状況

ビジターセンター職員は救助隊の緊急要員としても出動している。

傷病者対応時の出動状況

年度	出動区分	消防警備隊	救助隊	ビジターセンター	一般	合計	発生件数 (件)
平成 9 年度		12	20	10		42	33
平成 10 年度		8	33	16		57	49
平成 11 年度		9	28	27		64	55
平成 12 年度		11	18	45		74	70
平成 13 年度		9	21	22		52	46
平成 14 年度		9	14	31		54	51
平成 15 年度		8	10	19		37	33
平成 17 年度		16	12	35		63	59
平成 18 年度		17	22	77		116	80
平成 19 年度		10	18	106	2	136	109
平成 20 年度		15	12	68		95	85
平成 21 年度		16	18	86	1	121	86
平成 22 年度		21	22	69		112	71
平成 23 年度		15	15	98		128	98
平成 24 年度		16	19	85		120	85
平成 25 年度		7	16	87		110	90
平成 26 年度		12	12	63		87	63
平成 27 年度		19	24	68	1	112	93
平成 28 年度		9	8	39		56	51
平成 29 年度		24	9	58		91	67
平成 30 年度		11	8	61		80	66

* 消防：防災ヘリを要請した件数(担架搬送も含める)

* 救助隊：近隣の関係者が出動した人工

* ビジターセンター職員が関与した人工

(2) ヘリコプター要請状況

傷病事故 66 件のうち 11 件がヘリコプターでの搬送だった。地域別では山ノ鼻地区 5 件、尾瀬沼地区 6 件だった（前年度は山ノ鼻 6 件、尾瀬沼 7 件）。今後も現場の救助組織と消防・防災ヘリとの連携を強化し、傷病者をより迅速に医療機関に引き渡せるよう体制整備を充実させる必要があると思われる。

防災ヘリコプター要請状況

年度	出動区分	依頼 件数	負傷者 救助	病人等 救助	行方不 明捜索	遺体 収容	収容人 数計
平成 9 年度		5	3	1	1		5
平成 10 年度		3	3				3
平成 11 年度		5	5				5
平成 12 年度		7	5	1	1		7
平成 13 年度		6	6				6
平成 14 年度		6	4	1	1		6
平成 15 年度		6	4	1			5
平成 16 年度		7	7				7
平成 17 年度		12	8	4			12
平成 18 年度		8	3	3		2	8
平成 19 年度		11	6	4			10
平成 20 年度		13	10	3			13
平成 21 年度		9	7	2			9
平成 22 年度		17	14	3			17
平成 23 年度		14	10	4			14
平成 24 年度		15	11	2	1	1	15
平成 25 年度		7	7				7
平成 26 年度		9	8	1			9
平成 27 年度		19	14	5			19
平成 28 年度		5	4	1			5
平成 29 年度		13	7	5		1	13
平成 30 年度		11	5	6			11

※尾瀬山の鼻 V C、尾瀬沼 V C に対応した件数